

## 〈書 評〉

**Talking to Parents**

D.W. Winnicott 著

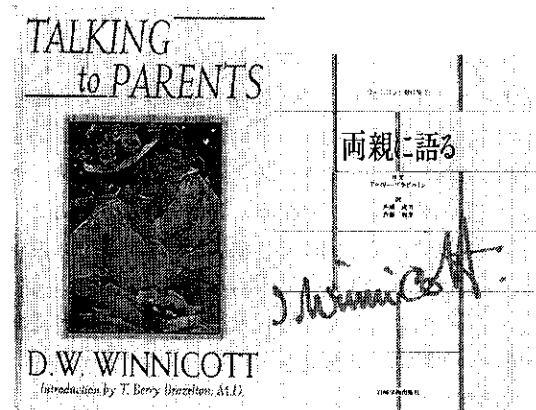
21×14cm 142頁

Addison-Wesley Publishing Company 1993年

本書の著者ウィニコット Winnicott は、小児科医であると同時に児童精神科医でもあるという。ユニークな人生を歩んだ人である。彼自身は1971年に亡くなっているが、その後彼の名前は本国の英国を越え、子どもに関心を持つ世界中の人の間に急速に浸透しつつある。それは彼の説く発達論が、心に病を持つ子ども達の内面世界を理解するためのみでなく、健康な子ども達の心を理解するためにも優れた理論であることが、認められてきつつあるからであろう。彼は病気の心と向かい合いながら、病気の心はどのような育児から生まれるかということ、そうした心を作らないための子育てとはいかにあるべきかという予防医学にいつも思いを巡らせていた。そうした思いを、彼は折々のラジオ放送などの機会をとらえて、直接、母親達に語りかけたのである。今回彼の著作を管理しているウィニコット・トラストから、彼がこれまでにラジオで母親向けに話した口演をまとめ、出版されたのが本書である。

本書の内容は、母親たちのお喋りにウィニコットがコメントしたり、また原稿なしで対話したりというように、当意即妙にその場で相手に向けて考えられたものであるが、この中に看護婦でもあるクレア・レイナーと、育児に自信のない母親が感じがちな罪悪感を巡って交わした、次のような対話がある。

「ウィニコット：・・・あなたのおっしゃったのは、十分責任を感じるためには、疑問をもつことが必要だということのように思います。母親を敏感にさせ、自



分の考えを点検させるのは、この罪の意識だと私は思います。なぜなら、罪の意識を感じる能力のない親がいますが、そういう人たちは子どもが病気になっても気づきさえしないからなのです。

C.レイナー：そうですね。子どもについてそんなふうに考えられれば、かなり楽しいに違いありません。」

ウィニコットは、もし親を選べるなら、この罪悪感の強い親の方を選びたいとまで言いきっている。こうして、罪悪感をもつという一見、悪いとみなされている親の態度を、対談者であるレイナーが、実際に自分の子どもを産んだときの実話に即して展開させながら、その中に自分の見解を織り込み、これまで常識として母親たちがとらわれてしまっている考えを逆転させ、その結果、母親たちに希望を持たせる。こうした逆転の発想を、我々はこの本のいたる所に見い出す。彼は生前、治療の天才と言われていた。彼が母親に向けた語り口がどのようなものであったかを学ぶことは、予防医学としての母子保健活動の中で、我々が母親達に語りかける際に有用な導きの糸になるであろう。なお、本書は1994年10月に岩崎学術出版社から「両親に語る」というタイトルで、拙訳が出版されている。参考にしていただければ幸いです。

井原成男（母子保健学部）